



Title	富本憲吉の日常陶器
Author(s)	吉竹, 彩子
Citation	デザイン理論. 1997, 36, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

富本憲吉の日常陶器

吉竹彩子／豊田市美術館

1 はじめに

この発表は、富本憲吉が1930年代を中心に各地の窯場に出かけて手がけた陶磁器類——富本自身は安い¹⁾陶器と呼んだ——を紹介するものである。日本の近代陶芸史における富本憲吉の重要性が、ますます堅固に説かれる現在にあってもなお言及されることの少ない、この安い陶器の試みを取り上げることは、富本と民芸運動の関係の再考に繋がるであろう。加えてこの考察は、「模様」を通して富本憲吉を捉え直していくための一階梯として位置づけられるものである。

2 安い陶器

富本憲吉が、安くて数多く焼かれる陶器への意欲を最初に公にしたのは、1917年のことである。この試みは1929年に初めて実現して後、30年代に幾度か実行された。「安い陶器」は、通常東京で制作をしている富本が各地の窯場に出かけ、そこで既成の素地に自身で絵付けをすることによって作られた。富本は1929年に信楽、1930年に波佐見・木原（ともに長崎県）・益子、1932年に品野、1934年に品野・赤津（ともに瀬戸）、1937年に京都清水へ出かけたことがわかっており、僅かではあるがその時の製品も残っている。（スライドによる製品・資料紹介）

例えば1930年波佐見には、1月から4月まで断続的に4回ほど滞在し、2回目の滞在時は木原にも足を伸ばした。結局波佐見では合計1750の既成素地に筆やゴム版で絵付けを行い、木原では100の既成素地と50の自製素地に絵付けをした。波佐見での製品は2月に東

京で開かれた国画展会場の片隅や、益子での製品と併せて5月に銀座鳩居堂で販売された。また、1937年の清水における仕事は、菓子皿3000枚という制作依頼を受けたものである。

安い陶器と現在よく知られている安くない方の陶器との関係について、富本自身は両者を区別して考えており、しかも安くない陶器が生活の糧になると述べている。加えてここで強調したいのは、富本の安い陶器への関りが「模様」を通したものだったことである。それは、(1)富本オリジナルの模様が、(2)富本自身の手で描かれたという二重の意味をもっている。本来富本の言う「模様」とは、「竹林月夜」「野葡萄」といったここで紹介するような絵模様のみを指すものではない。そのことに留意する必要はあるものの、模様は安い陶器においていかされ、逆に安い陶器は絵模様をより完全な模様に近づける機会を提供していたのである。

3-1 美術工芸、産業工芸、民芸

安くて数多く作られる陶器という富本の試みに触れた従来の記述は、それを漠然と彼のモリス受容の一例としてきた。モリスと富本という大きな課題はひとまず置き、ここでは富本の試みを、見出しのように三分して捉えられる同時代の工芸のなかに据えた。すると、富本と同時代の工芸の共通点が浮かんでくる。美術工芸家の立場から、安くて数多い工芸を目指すという志向そのものは富本が早くから述べていたものだが、それを実践に移した1930年代という時代には、ほかにも杉田禾堂のように量産を目指す美術工芸家がいた。

また、富本はこの試みを機械による大量生産と結び付けて考えていた。例えば、1930年の年賀状には、「機械の有利の上に打ち立てられた工芸、美術を以て行く可き」「ハンドメードを楽しむ如きは不道徳なりと云ふ如き世近し、若し近からざれば日本は亡ぶ（中略）と言う方針で此の光みなぎる千九百參拾年を進みたいと思ひます」との抱負を記している^①。機械と芸術の交流が盛んに説かれていた1930年の風が、富本にも吹き寄せていたのである。

3-2 民芸、柳宗悦、バーナード・リーチ

同じ年賀状は「コウ言う事は柳に聞かせると狂気になるか、小生を狂氣者扱いにするか二つに一つ、内密々々。」と締めくくられる。しかし、富本が自らの安い陶器の試みを、機械による生産への思いとともに熱く語った相手こそ、柳宗悦であった。結局のところ人の力で、だが大量に安い陶磁器を生産する波佐見という窯業地にあって富本は、イギリスかアメリカに行き機械生産の方法を学びたいと柳に訴える^②。だが、柳は富本の機械論を浅薄だとして冷ややかに退けるのであった。

バーナード・リーチにおいても同様である。柳もリーチも富本の機械論への批難が先に立ち、富本の安い陶器の試みに理解を寄せるることはなかった。すなわち、ときに富本の日常性に対する志向の欠如が原因とされる富本と民芸の離反は、むしろ同じ日常性の上での背きあいと捉えるべきなのである。富本は自身の瀬戸での試みを「これが、私の考えの下手ものです」^③と言っている。

さて、リーチにも安い陶器といえる試みがあって、それは戦後成功を収めた。自らの工房リーチ・ポタリーを利用したスタンダード・ウェアである。興味深いのは、このスタンダード・ウェアは多くの場合、絵模様が省かれて

いて、それにリーチの手による絵模様が加わると、B. L. decorated という特別価格の製品となることである。ここで富本に戻るならば、模様のみを通して数多い陶磁器に関わろうとした、彼の方法が際立つであろう。リーチは模様によって少數性を志向し、富本は多數を志向していた。

4 おわりに

近年、富本憲吉における白磁の重要性が繰り返し説かれている^④。模様や釉薬を脱ぎ捨てた、陶器として本質的な姿——この点を基調に富本が白磁について展開した議論は雄弁で、1930年代の発表当時から現在の評価に至るまで、無理なく受け入れられてきた。それに引き換え、安い陶器について語った富本は、感情的で説得力を持たなかった。だが、だからこそこの富本の試みに言葉を与えていきたいのである。その思いは、「模様」という言葉に豊かな思索と実践をこめた富本を考えるとき、一層強くなる。

注

- 1) 実際の売価については今後の課題である。
- 2) 富本憲吉、野島康三宛て書簡、1930年1月2日付。
- 3) 富本憲吉、柳宗悦宛て書簡、1930年2月20日付。
- 4) 富本憲吉、野島康三宛て書簡、1935年1月25日付。
- 5) 金子賢治「富本憲吉の造形思考」（前編・後編）、『炎芸術』43・45、1995・1996ほか